

「拓地安民」

岩手県一戸町・奥中山開拓

奥中山開拓は、岩手県北部の一戸町の奥中山高原スキー場がある西岳の東麓に位置する。

標高は327～793[㌢]で、地層は全域火山灰土に覆われ、さらに地下水は低く、農業には適さない土地とされてきた。農耕期間は5月から10月の約半年しかなく、霜害も多い。

戦中は陸軍の軍馬補充部のあったところで、戦後に国の緊急開拓事業でこの軍馬補充部跡地約4000[㌧]と、周辺国有林が解放されることとなった。

1946（昭和21）年3月に入植したのは、農業の経験もない勤め人、旧軍人、中国や樺太などからの引き上げ者、地元の2、3男ら567戸。

農業に適さない土地で、農業をやったことがない人々が作物を作るのは容易ではなく、生活は困窮を極めた。開墾補助金などもあったが、本来設備投資する金が生活費に回ることも多々あった。

この当時の主な換金作物は、麻、ハッカ、コンニャクなどであったが、これらもうまくいかず、雑穀中心から酪農へ早く転換しようと努力していった。

こうした中、48年に奥中山開拓農業協同組合が発足し、49年に既存農協と合併して奥中山開拓畜産農業協同組合となった（現在は新岩手農業協同組合）。

農協は開拓振興計画に基づいて無計画な入植を再検討し、開拓道路の整備や土地配分の是正を59年から実施した。このころから草地造成、乳牛や、大型機械の導入などを行って酪農への道が開けてきた。

酪農の技術向上には、地域単位で研修し合う酪農同志会の活動が大きかった。酪農家、同志会、農協が一体となって乳質改善等に取り組み、成果を上げてきた。

また、68年に農協に野菜部会が発足し、レタス、夏ダイコン、アスパラガスなど高冷地野菜の名産地となっていた。

76年9月1日に開拓30周年記念式典が奥中山中学校で開催され「拓地安民」の碑（写真）の除幕式も行われた。

現在、奥中山の酪農家は26戸で、飼養頭数3600頭（内成牛が2400頭）。

奥中山開拓 「拓地安民」

- ①調査日 2016年9月1日
- ②所在 二戸郡一戸町
- ③地区の沿革 標高 327～793 米で、地層は全域火山灰土に覆われ、さらに地下水は低くて農業には適さない土地とされてきた軍馬補充部跡地約4千^歩と、周辺国有林が解放され、農業の経験もない勤め人、旧軍人、中国や樺太などからの引き上げ者、地元の2、3男ら567戸が昭和21年3月に入植。

国有地 四千町歩が未墾地として開放され、600戸が入植した。

- ④設置年月日 昭和51年9月
- ⑤設置者 不明
- ⑥碑名 開拓碑
- ⑦碑文（表面） 拓地安眠
- ⑧碑文（裏面） 昭和二十年夏八月日本はついに敗戦の日を迎えた 生産交通通信等の手段は殆ど馬有に帰し都市は文字通り焼土と化した国民は茫然自失した しかし生き残った者は家族と共に今日を生きぬき明日に永らえねばならなかった自からと家族の為にその食を得ることが誰にとっても緊急の課題となった 時の政府もこの事態に対応し緊急開拓事業をもって最高施策の一つとした 当奥中山開拓地はこのとき三本木軍馬補充部奥中山支部に属する国有林八千町歩のうち四千町歩が未墾地として開放されたものである これに対し純入植者凡そ三三〇戸を中心に地元増反者を合わせて六〇〇戸がその配分を受け昭和二十年内に早くも開墾の鋤が下ろされた 開墾も開拓も言うは一口であるけれども実態は一瞬一瞬の苦斗の積み重ねであった土地は荊棘茂る荒野であり人々は鋤一本でこれに挑まねばならなかったブルトーザーなど考えることも出来ない時代だった 荒野は人間の汗を吸わねば耕地とはならず 開拓者たちはこの苦難を自らの運命の如く受諾し克くこれに耐えて一つ一つを乗り越えた かくして過ぎた年月は三十年その間止むなき事情で離脱し去った者約二〇数戸踏み止った者達は今にして漸く生活の安定を得るに至った現状必ずしも満足すべきものではないが過ぎた苦難の三〇年を記念し次の新しい飛躍への決意の為にここに之の碑を建立するものである

平成五十一年九月

- ⑨現在の状況 地区内で管理されている。

